

Title	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究 第4号 編集後記／奥付
Author(s)	
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 4 P.112-P.112
Issue Date	2008-03-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/25016
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

編集後記

本誌のために2007年1年間の活動記録をまとめていて、かなり活発に研究会活動がもたれたと感じました。正式会員300人ちょっとの規模の会にしては、実り多い1年間でした。母語・継承語・バイリンガル教育研究への社会的な要請がいつそう高まる中、今後の企画・立案・実施が全員参加の方向で推進されることを願っています。

研究会の開催場所が東京中心で、時に、関西があるだけでは、海外会員にはなかなか参加が厳しいこととなります。国境を軽々と越える通信網をフルに利用して会員同士の情報と意見の交換を活発化したいものです。

2007年の大会後に新しく入られた会員の関心分野を見ると、国内在住の方はマイノリティ言語を母語とする児童・生徒の教育関係、国外在住の方は継承日本語教育関係に集約されました。その意味で、2008年1月から、海外会員を中心に継承日本語教育についてのメールでの意見交換が始まったことを喜んでいます。本誌を手にとった非会員の方はぜひ会員手続きをお取りいただき、メール上のやりとりにご参加ください。

本誌が刊行される2008年は、ブラジル移民100周年の年です。1908年に笠戸丸がブラジルのサントス港に着いて以来、集団移住で渡った人々は25万人にのぼり、いまやその子孫は140万人とも150万人とも言われます。そして、現在は子ども、孫の世代30万人以上が日本に在住しています。往復を繰り返す家族もあって、しっかりと母語が根付く前に移動をくり返すような状況で育ちつつある子どもたちも決して少なくありません。「ぼくはブラジル人だろうか、日本人だろうか。ブラジル人でいいんだ。でもブラジルでは、ちょっと違うと感じる。日本のことのほうがよくわかるけれど、日本人になり切ることも出来ないし、なりたくもない。けれど親のブラジルなまりの日本語は恥ずかしい。毎日の生活で日本語に困ることはないけれど、勉強のことはわからないのがいっぱいある。就職のことを考えると日本に帰化したほうがいいのかも…」

2つ、3つの言語と社会の中でゆれ動く子どもたちの力になるにあたって、しっかりとした研究とそれに基づく教育的介入は必至です。学習環境や言語環境、言語習得のデータに基づく検証が、そして、教授法や評価に関する提言や実践に基づく研究が、教育実践にどう貢献できるか、私たちの研究も正念場を迎えています。今後の会の活動ですが、創立の際の4分野を念頭に、会員の皆さんの自律的参加を基本として、着実に進めていきたいと思えます。

MHB研究会事務局担当理事 佐々木 倫子

母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究 第4号

2008年3月31日 発行©

発行者：母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究会

〒194-0294 東京都町田市常盤町3758 桜美林大学 言語教育研究所内

Tel. 042-797-2016 Fax. 042-797-1887

URL. <http://www.mhb.jp> (ホームページ)

印刷所：有限会社 津田印刷 〒606-0002 京都市左京区岩倉中大鷲町14